

「山の音」の創作への再認識

譚 晶 華

川端康成の戦後の代表作、生涯の創作における最も長い小説「山の音」は一九四九年九月に「改造文芸」に連載し始め、一九五四年四月に筑摩書房から単行本を刊行されるまで、前後にして約四年半かかった。無論、その間作者は「千羽鶴」等の作品も書いていたが、長い時間をかけて成熟かつ精巧に重要な作品の構想をすることは川端文学の創作の一貫とした特徴である。「山の音」には川端文学のその他の創作に異なる特色があり、戦後の川端文学創作のユニークな変化とも見られるように思われる。本論は「山の音」の創作に現れている社会性の意義の角度から、その創作への再認識を述べてみよう。

一

川端文学の他の創作と同じく、長編小説「山の音」の筋は非常に

簡単である。六十歳を過ぎた尾形信吾は鎌倉に住み、老妻の保子、息子修一と菊子夫婦と暮らしている。不眠でよく夢を見たり、忘れっぽくてよくつぶやいたりする信吾はすでに老いの境に至ったことに気づき、ある夏の夜に、地鳴りのような山の音を聞き取った。娘の房子は夫婦関係が行き詰まったため、二人の子を連れて実家に帰ってきた。戦場から戻ってきた修一は結婚して間もなく、戦争未亡人絹子を愛人としてつきあい、常に酔っ払って夜遅く帰宅し、日曜日すら家にいない。信吾には、精神上的の最大な慰めは菊子との交流である。その後、修一の妻と情婦はほとんど同時に妊娠した。人格上の「潔癖」で、菊子は自らの決断できっぱりと堕胎したが、絹子はどうしても子を産もうとした。婿の相原は劣悪な酒から麻薬販売まで墮落し、おしまいに心中の道をたどった。菊子の家庭生活の幸福のため、信吾は進んで別居することを提言するが、菊子は別居

後の修一がなお怖く、いつまでも信吾の世話をしたと言った。

川端文学は一体純文学と言えるかどうかは人によって見解が違うが、「外国人が理解できるだろうか」「日本人にもかかわらずどうも川端文学がよく分からない」というしばしば耳にする声に現れている難解さと芸術の美意識のため、殆どの中国の日本文学研究者はまずそれを純文学として扱っているようである。日本の文壇の「山の音」に対する評論も少なくない。それらの視点はだいたい娯楽性と伝奇性の高い大衆文学や社会風俗を表わす中間小説から大きく離れて、純文学の難解性、高踏性、抽象性や芸術的美意識の表現に絞られているイメージが強い。それは一応以下のようにまとめられるかと思われる。

(一) 死について

「雪国」「千羽鶴」等の代表作と同じように、「山の音」は最初的一段に独立した世界を描き出し、その主な人物、必要な舞台装置と作品のモチーフがすでにそろっている。作品にいわゆる山の音を次のように描いている。

鎌倉の尾形家の家は山の近くである。ある「月夜」、信吾は山の音が聞こえた。「ぎゃあっ、ぎゃあっ」という蟬の音がまず聞こえる。信吾は家に飛び込んで蚊帳の裾にとまった蟬を外へ投げて、雨戸に掴まって、桜の木のほうを見ていた。「月の夜が深いように思

われる。深さが横向けに遠くへ感じられるのだ」「そうして、ふと信吾に山の音が聞こえた。風はない。月は満月に近く明るい。湿っぽい夜気で、小山の上を描く木々の輪郭はぼやけている。しかし風に動いてはいない」「鎌倉のいわゆる谷の奥で、波が聞える夜もあるから、信吾は海の音かと疑ったが、やはり山の音だった(筆者は中国語版の訳者で、漢語では「声」と「音」が同義であるが、音より声のほうが音量が大きいので、表題を「山之声」と翻訳した)」「遠い風の音に似ているが、地鳴りともいう深い底力があった。自分の頭のなかに聞えるようでもあるので、信吾は耳鳴りかと思って、頭を振ってみた。音はやんだ。音がやんだ後で、信吾ははじめて恐怖におそわれた。死期を告知されたのではないかと寒けがした」

すると、わりと共通的な見方は、「この小説は初めから、老年が迫って、物忘れも激しくなった六十二歳の主人公の不安定さを描くことに力点がおかれているのが分かった」その「不安定」は即ち死の来るのを心配するということである(伊藤整・「川端康成(二)」)。この文学的テーマは老人の考え方、同じ世代の友達の次々の死及び病氣にかかった老人の夢によって十分に現れている。長谷川泉はこう述べている。「死もまた、転機を作り出す上には便利で重要な方法である。『山の音』はその契機を巧みに活用した。『眠れる美女』の終焉においても、死が巧みに使われていた。この手法は、川端文学開扉の鍵である『末期の眼』と関連がある」「『山の音』は老人の文

学として注目された点がある。老人の文学には、死に片足を踏み入れた感慨を拭い去ることはできなからう」(『千羽鶴』と『山の音』)。確かに、この作品には死に繋がる幻影がたくさんある。信吾の頭に時々浮かび上がる保子の亡くなった美貌の姉、生死不明にしても心中の相手の女を殺した房子の夫相原、十年もあっていないが、妻君の更年期にひどく虐待された鳥山の死、若い女を連れ込んだ温泉宿で頓死した水田、戦争中精神異常をきたした北本の死等々がある。だから、こういうふうに考えている評論家もいる。「悲しみを知らずして数々の死に遭ったことが、生が死であり、死が生であるような、生と死との連続という感情を芽生えさせた。『死者の世界』に対して、何時か彼は『生の感情』を持つようになった。死における生、生における死という考え方が何時も氏の作品の陰翳深い地色として存在する」(山本健吉・『川端康成』)。川端にとっては、幼いときから死は彼と切り離されなかった。ほとんどの作家は死を物語の終結にするのに対し、川端には死を始めとする特色がある(林武志の「川端康成研究」を参照)。

(二) 夢と幻想について

肉体が老衰し、記憶力が衰えながらも、想像力が依然として豊かであるという老人の特色を表わすために、「山の音」は主人公に多くの夢を見させた。これらの夢は研究者の注意を引き、その意味お

よび夢と夢との間の関連を分析させるようになった。この作品に信吾の夢は合わせて九つある。(1)死人の娘に触れた、淫らな夢。(2)日本三景の一つ、松島の夢で、信吾は松蔭の草原で女を抱擁していた。(3)保子の姉が信吾を呼ぶ夢。(4)十四、五歳の聖少女が墮胎する夢。(5)アメリカのあごひげの男に関する夢。(6)菊子が嫁に来る前に交際と軽い縁談のあった女の夢。信吾はその女を菊子の化身かとも思った。(7)若い陸軍将校になって蚊の群れを切りまくった夢。(8)駝鳥の卵と蛇の卵の夢。(9)昔故郷の山で見た雪崩の幻像のような白日夢。これらの夢は作品の筋だての展開、時間の移りおよび主人公の心理分析の点において、重要かつ微妙な役割を果たしているようである。「これは夢の分析としては、信吾の心の奥底の真実を語っているようである。夢は幻想の可能性を無限に拡大する。だから信吾の想念は思いのままに飛翔する」(長谷川泉・『千羽鶴』と『山の音』)。川端の作品の世界は「真実が仮象であり、仮象が真実であるような世界、正気が狂気であり、狂気が正気であるような世界、夢が現実であり、現実が夢であるような世界である。氏が『東方の心』と言ったことも、詮じつめればこのことを措いて外にはない」(山本健吉・『川端康成』)。

(三) エロティシズムと不倫について

「山の音」にある信吾と菊子とのいわゆるエロティシズム及び精神

の不倫についての描写は極めて婉曲、含蓄的で、ちっとも常軌を逸していないと思っているが、一部の評論家はやはりそれを重要な視点として研究している。その指摘によると、「山の音」において、信吾は一生保子の姉に憧れて、菊子の美貌から保子の姉の美しい面影までも甦ってくる。菊子の代わりに修一の友達の花の姿を借りたのは実はその精神の不倫を隠し、苛責をごまかすためだという。そして、もし信吾の欲望がほしきままに許されるものなら、信吾は処女の菊子、つまり修一と結婚する前の菊子を愛したのである。更に、修一が絹子達に菊子が子供だ子供だと言っているのは、菊子の身体や性的な反応のことを指し、修一の精神的麻痺と残忍さのゆえに、菊子の「女」の性が目覚めたことになるという指摘もある。

信吾が慈童の能面を買ったこともいつもそのエロスと不倫を表わす例とされる。信吾はその能面が美しいと思って、危うく接吻しかかった。その後、彼は菊子にその慈童の能面をつけさせた。これによって、実際に結ばれない舅と嫁の間の恋情と、女をこしらえて帰らない夫を待つ妻の情が、慈童の面を通して描かれていると思う人もいる。「作者は、二人の精神的不倫の場面を面を中において一応遮断してみせる」という立原正秋は次のように述べた。「読者はここに表現されたエロティシズムをきれいだと言って簡単に見過ごしてしまうが、繊細な文章の裏に舅と嫁の『醜』がこれほど確かに描かれた作品は他に見当たらない」（『川端文学のエロティシズム』）。

前述の「山の音」に対する代表的な見方はいずれも作品の分析に基づき、日本の学者の視点と文芸観をよく表わし、日本文壇の戦後の川端文学の創作に対する見方を知るためにプラスになるに違いない。それと同時に、上記の見方の共通点としては、やはり「山の音」の創作をその作家のその他の創作と同一視する角度、即ち非社会性の作品として、芸術の美意識や難解性の角度から念入りに見て評価したということが分かった。瀬沼茂樹が「川端康成作品小辞典」という文章に述べた次のような観点は川端文学が人々に与えている一般的な印象だと言えよう。

社会性を欠くという面で、無論新感覚派は川端康成と馬が合う。……従って、近代小説を構成する要因、例えば生活への追求、社会制度と習慣の矛盾、思想との正確な格闘などは川端の小説においてすべて抹殺され、残ったのは女性の肉体と自然と古い文化に対する詠嘆のみである。

しかし、事実上「山の音」に反映された内容は上記の指摘より幅広く、場合によってはそれと正反対であり、この作品は恐らく川端の戦後の創作乃至彼のあらゆる創作に問題を最も多く扱っているものであろう。それは一貫した文学的なイメージを保ちながら、また戦後の日本社会の問題とそれに関わる通俗的な内容を表わそうとしたのである。現在、一応その後者に対して分析・研究と再認識を必要があると思う。

二

「山の音」をよく読めば、死の陰に覆われた老人の気持ちと情欲ばかりでなく、私小説の創作と全く違った写真的手法でフィクションをし、戦後の日本の近代家父長家族制度の基本的に解体された後の家庭の様子とその変革による日本人の精神上の変化をも十分に表わしているのが感じられる。

親子が同じ会社勤め、安定した収入のある四大家族の信吾の家庭は極く普通のものである。しかし、作者はそれをさまざまな危機を孕んでいる場所として描き、その所帯主、家庭の管理人信吾も自ずから矛盾の中心となっている。信吾の演じた各役柄を通して、作者の描いたこの戦後の日本家庭を見よう。

父親としての信吾は二人の子があり、いずれも結婚した。敗戦後、戦場から帰って来た息子修一は結婚して間もなく、信吾の秘書英子をしよっちゅう踊りに連れていくだけでなく、絹子を愛人にしている。その絹子が妊娠してから、彼は殴ったり蹴ったりして、無理強いされた絹子とその子が修一との間にできた子ではないと言っただけで、親である信吾はすぐに平気になった。このような息子に対して、親である信吾は修一が戦争中に悪くなったと思いがち、良心を持って菊子と私生児の問題に対応しろと警告し、一方、自ら絹子と顔を合わせて交渉をした。でも、修一は自分の墮落をあまり気にせず、「僕はそんな

感傷的な運命論者じゃありませんよ。敵の鉄砲玉が耳すれすれに、びゅんびゅん鳴って通って、一つもあたらなかったんだ。中国や南方にだって、落し子が生まれてるかもしれない。落し子と会って、知らずに別れるくらい、耳のそばを通る鉄砲玉にくらべたら、なんでもありませんよ。命の危険はない」と厚顔にも大言を言った。更に、彼は自分の妻菊子を含んだ戦後の日本の女性がみな自由であると思っている。その自由の意味を修一はこう説明した。婚姻の拘束を受けず、誘ったら来るし、普段は「お高い風を見せているが、まともな暮しじゃなく、不安定につかれているんだ」。そして女性は「兵隊でも囚人でもありやしない」。修一が自分の墮落に探し出した理由はある意味で当時戦場から戻った兵士の思想の現れであり、正に坂口安吾が「墮落論」に言った通り「戦争の破壊も人間自体をどう為しうるものでもない。負けたから落ちるのではない。人間だから落ちるのだ」と通じる。大量の修一は戦後の価値観と社会の激しい変化によって生まれてきたのだろう。こうした息子に向かって、信吾は「苦笑した」「咽が詰まった」ばかりでなく、「むしろきょとんとした」。

さて、娘のほうはどうなっているのか。信吾は房子が保子の姉のような美女だと期待していたが、希望と裏腹に、房子は醜いばかりでなく、性質が偏屈で、怒りっぽく、嫉妬と反逆心が強く、必要な教養も少なく、野暮である。風呂敷包み一つと幼い子二人だけと一

緒に実家に戻った房子はかなり不幸であり、その苦しみでヒステリックにもなった。父親としての信吾は房子に小言を言われて、こっそりと家を出て孫のために着物を探したり、娘夫婦の平和のためにしつかりした社員に娘の足の悪い姑にお金を届けてもらったりするほかにどうしようもなかった。彼は昔から房子を嫌って、彼女の結婚の失敗には何の解決方法もなく、ただ悩んでいて「どこも憂鬱だよ」と嘆いただけである。

舅としての信吾と嫁菊子との関係についての描写は作品にも少なからずある。夫に愛人のあるのを知った彼女は悲しく孤独であり、その上に房子が幼い子二人を連れて帰って住み着いたため、女中さんのない家のほとんどの家事をするほかはない。毎朝、菊子は早く起き、朝食の仕度をし、また姪達の面倒見を手伝う。こうして我慢できるのは、理解と配慮をしてくれる舅信吾があるからである。もちろん、こうした配慮と労りは互いにしあうことになっていて、結局互いに依存しあうようになった。これをはっきり知った保子は信吾に言った。「修一ばかり可愛がってらしたじゃありませんか。……今だって、修一がそとに女をこしらえてるのに、なんともおっしやれないでしょう。妙に菊子をいたわって、かえって残酷よ。あの子はお父さまに悪いと思って、やきもちもやけやしない」。信吾の目の中の菊子は美しいばかりでなく、善良で教養がある。大雨の日に菊子が世界の子守歌のレコードを一人で聴きながらそとと歌っ

ていたのを見て、「信吾はあまい心を誘われた」。「信吾にとつては、菊子が鬱陶しい家庭の窓なのだ」、「若い嫁を見るとほっとする」。普段の話し合い、新宿の御苑で一緒にした散歩は信吾の気持ち伸び伸びとさせ、菊子のお土産の電気剃刀を信吾は大切にして手放すに忍びなくさせ、そして「娘らしくきれいな」菊子の電話の声を聞くと、「信吾は胸にやさしいものがしみるようだった」とある。また、「目ぶたまで温まって、窓の外の町が急にはっきり見えるようだった」とも形容される。修一が家に帰らない度に、「信吾は胸が曇った」、「菊子の顔を見るのを避けている」。菊子が墮胎してから、信吾は怒りをこらえられず、「お前は菊子の魂を殺した」と修一を責めた。菊子の幸福のため、信吾が別居を改めて提言したとき、「菊子は真剣な顔になって、『もし別れましたら、お父様にどんなお世話でもさせていただけだと思いますの。』『それは菊子の不幸だ。』『いいえ。よるこんですることに、不幸はありませんわ。』初めて菊子の情熱の表現であるかのように、信吾ははっとした。危険を感じた」。この作品の中に最も家族の間の優しい感情が現れる信吾と菊子との関係は一種の危機であるとも言える。菊子の存在は信吾には慰めでもあるし、危険でもある。ただし、この実際に存在している確実な危機は川端の手によってかなり婉曲的に書かれていると思われる。

所帯主である信吾本人は、「地位が安穩だった」し、「万人の苦難

と災厄のなかを、しゃあしゃあ泳いで来た」と友達に言われたが、六十歳を過ぎてからやはりいろいろ悩みがあった。例えば、還暦の年に血を吐いた。記憶力が悪く、よく夢を見るから、休むことを非常に希望し、そして、役に立たない頭を体から外して病院に送って洗濯してもらいたかったほどである。死んだ友達と隣人がしばしば彼を呼んでいるし、心の底に秘めている保子の姉に対する憧れが永遠に消えることなく、「思い出に稲妻のような明りがさすのも、そういう病的なことではなかった」。彼は人生の伴侶である保子に一生の不満を抱いて、娘房子が妻に似ていると認定した。一番大きな悩みと遺憾は「娘の家も息子の家も落ち着いてくれない」ことで、誰にでもこの悩みを訴えてみたい。そして、「今の世で、子供の結婚生活に、親がどれほど責任が持てるんだ」とつくづく考えている。

作者が描いたこの矛盾の多い、さまざまな危機の潜んでいる家庭は、戦後の日本の家父長家族制度が戦前と比べて更に速く崩壊した過程にある有様を割合によく表わしているのではないかと思う。

実は明治時代に、父から息子へと父系的に継承され、家族内の権力が父親に集中する家父長家族制はすでに打撃を受けて衰えを見せ崩壊し始めた。それは島崎藤村の「家」等の作品に描かれている。しかし、こうした解体と崩壊は時間と過程を必要とする。第二次世界大戦後、親による息子、娘の配偶者の決定、長男の家督相続、妾の承認及び「家」継承のための生殖重視等を基本的特徴とする家父

長制度は、その凭り掛かる土壌を失ったため基本的に崩壊したと言えよう。その代わりに、民主的個人主義の価値規範によって統制される家族メンバーの基本的人権と自由が尊重され、「家」の継承のための生殖よりも夫婦の愛情と信頼が強調され、そして家族が子供の社会化のための基本的場として重視され、遺産相続も兄弟姉妹の間で平等に分配されるという現代家族が支配的な位置に立つようになった。

「山の音」はこのような背景のもとにできた作品である。信吾が修一の放縦、房子の我ままに途方に暮れた原因は、伝統の家父長制の権威と論理ですでに戦後時代の息子・娘を説得し得なくなったことにある。信吾の身には家父長の影がやはり見られる。娘より彼はずっと息子を可愛がっている。尾形家の後継者である孫を一日も早く手に入れた。娘の婚姻が完全に失敗したとき、房子は信吾を睨んで、「あんな男に、私をくれたのは、いったいだれなの?」と詰ったことがある。信吾のもっとも好感を持つ嫁菊子までも舅と姑の孫ほしさを知っていながら、「潔癖」で自分から決めて墮胎した。これは戦後の若い世代が伝統的な家父長制度に厳しい挑戦をしかけていることを示すのではないだろうか。房子はかつて「この子はね、生れてから、きものというものを着たことがないんですよ。おしめだけです」と父親に愚痴をこぼし、そして当てつけがましく言った。「……おじいさんが買って下さるって」。更に、離婚してからま

た化粧品店でも文房具店でも自分の店を持つために父親の出資をせがんだ。息子、娘の目には、信吾の家父長の権威が跡形もなく消え去り、戦後の多くの日本家庭と同じように、父親はもはやただの経済的な援助者になった。この作品において、信吾と修一が重要な会話を交わすのは、東京行きの通勤の列車の中だけということが象徴的である。彼らは昔のような親子関係ではなく、いくら重要だと言っても、親が決めかねて、息子と検討と協議をするほかはない。反発も許され、かなり平等である。作者のこのような描写は決して気の向くままにしたものではない。その意図は一目瞭然である。

三

川端康成はノーベル文学賞の受賞作家として、次のようなイメージを人に与えている。「川端康成の文学はあきらかに日本的な美の伝統を表現していて、世界に向かって日本文学を代表するのに適わしいが、奇妙なことに明治以降の日本の近代文学の主流的傾向を代表している文学ではないのだ。その作風も発想も、また作家の生活態度も日本の近代文学としては風変わりであり、むしろ異端といった方がよい」(奥野健男「学研」現代日本の文学16「評伝の解説」。実は、彼は細かいものを書く巨匠である(三島由紀夫の「作家論」を参照)。「僕等の日常生活とはどういうものであるか、社会の制度や習慣やに僕等はどうな風にぶつかりどんな風に屈従するか。思想と性

格を異にする二人の人間の間にどんな葛藤が生ずるか、等々凡そ小説家の好奇の対象となるものに、この作家が、どんなに無関心であるかは、彼の作を少し注意して読めば直ぐ分かることである」(小林秀雄「川端康成」)。

上記の川端文学に対する評価は無論正しくて急所を突いていると思う。ただし、この点について「山の音」は恐らく川端の創作の中に多くない例外であるかも知れない。作品の中に戦後日本の社会、庶民の様子に対する描写に紙数をかなり割かれて、そしてそれは意図的である。作者は下記のような幾つかの方面から、社会の日常生活と風俗の有様、人々と社会習慣・制度との矛盾、価値観の変化による悩みを描き出そうとしたのではないかと思われる。

(一) 戦争による損害と暗い影

戦争の加害者として、日本は東アジア、東南アジア人民に大きな災いを与えたと同時に、自らの国民にも酷い損害と苦痛をもたらした。「山の音」にこう描いている。割と年の取っている人は皆戦争に苦しめられ、「信吾の学校の仲間と言え、現在六十過ぎで、戦争の半ばから敗戦の後に、運命の転落をしたものが少なくなかった。五十代では上の方にいるから、落ちるとひどく、また倒れると立ちにくかった。息子を戦争で死なせる年齢でもあった」。信吾の同級生北本も戦争中に三人の息子を痛ましく失った。そして、彼の会社

の仕事が戦争向きに変わったとき、北本は不用の技術屋になっていた。家でぶらぶらしている彼はいつのまにか毎日鏡の前にしゃがんで白髪を抜くようになった。とうとう髪の毛を抜いてしまった彼は精神病院へ入れられ、空襲の激しい最中に死んだ。完全に戦争の犠牲者になったこの家庭の始末は読者に深い印象を残しただろう。

「山の音」では戦争未亡人の生活も描かれている。修一の情婦絹子と同居している池田も戦争未亡人で、絹子には子供がないが、池田にはある。彼女達の夫は戦場へ赴いたきり戻らない。若いのに未亡人になった二人も「辛抱していた」。「戦死した人の子がいっぱいて、母親を苦しめていますわ。……男の人が遠くに忘れた子供を、女が育てます」。戦争は女をひどい目に遭わせた。池田が言ったように「絹子さんは不幸と言えば不幸ですわ」。感情の飢渴で、修一的情婦になるのが墮落だと知っていながら、甘んじて彼に弄ばれ、侮辱されている絹子はこんなときに「自分の戦死した夫が戦地で女遊びしている姿のように見え」、「自分が夫の相手の女のような錯覚をおこして、下品な歌をうたって泣いてしまいました」と思う。責められたとき、絹子は「よその人を返すから、私の戦死した夫を返せ」と言った。「絹子は顔をあげた。さっきから涙を出していたが、新しい涙が頬を流れてつづいた」。これで分かるように、作者は當時のたくさんの方々の戦争未亡人のある社会現状の表面にとどまらず、それらの女性の心の底にあるこの上ない苦痛を抉り出そうとしたのである。

ある。

修一という人物にも戦争の暗い影が見られる。彼は戦場から戻ってから墮落し続けている。たてまえば「修一は情欲にも恋愛にも悩むふうがなかった」が、実際は朝鮮戦争が勃発する背景のもとに、彼は将来の見通しがなかなかなかったようである。「今も新しい戦争が僕らを追っかけて来ているのかもしれないし、僕らのなかの前の戦争が、亡霊のように僕らを追っかけているかもしれないです」と修一は憎さげに言った。修一には自分なりの悩みがあるからこそ、エゴ、残酷、病態的になったのではないか。修一の実在性は典型的な意味がある。戦場で何の怪我もなかったまま帰国したのは有り難いことであるが、正に池田が「修一さんもやはり負傷してお帰りになっているのよ。心の負傷兵だわ」と指摘するとおりである。このことは本当に急所をずばりと言い当てている。

(二) 戦後の思想と観念の変化

女性の自立について。戦後、民主主義の観念の確立によって、女性には選挙権が与えられた。それまで男性と家庭に従属していた日本女性の真の自立は戦後から始まったのである。このことは「山の音」にも現れている。

戦争未亡人池田と絹子は夫を失ってから、そのまま夫の家に残るかまたは再婚することが選べるが、作品では、「二人とも、主人の

家を出て、実家にも帰らないで、まあ自由の身でございましょう。

自由に考えようと言い合せて、主人の写真なんか持っていたのも、行李に入れてしまいましたの」。池田は家庭教師になり、一人で幾つかの学年の生徒、六七軒を廻って教えている。絹子はフランス語を勉強したり、アメリカの雑誌をどんどん読んだりして、洋裁の仕立てを習い、そのうちに自分の店を持つようになった。再婚もできたらしようと言ったが、さっきに頼りになる男性を探したわけではない。妊娠した絹子は自分の子を産もうとして、信吾に懇願されても、修一に暴力で墮胎を迫られてもびくともせず、なんとかして抵抗した。戦後女性の自立精神をよく表わしている。

戦後の法律が、親子よりも夫婦を単位にすることに改まったのは伝統の家父長制度の崩壊の加速を宣告したと言える。この点については前にすでに述べたので、ここに贅言しない。この観念の変化による社会の変革は相当意味深い。この作品において、信吾が何回か別居を提言することは、彼の家もその変革の過程にあるのを意味し、それを見逃してはならぬことである。

性に関する観念の変化。新聞の報道を借りて、「山の音」は中学・高校生の妊娠中絶の社会問題を述べた。「少女が双児を産む。青森にゆがんだ（春のめざめ）」という報道の中に、十三歳から十五歳までの少女の妊娠中絶者を除いても、十六歳から十八歳までの妊娠中絶者が青森一県で四百名にのぼったとある。「この新聞記事

に、信吾はショックを受けた。そして眠ったので、少女の墮胎を夢に見た」。そして、修一の口を借りて、戦後の日本青年の貞操観にも触れた。「ここでは貞操観念が失われているのではない。男は一人の女性を愛しつづける苦しさ、女が一人の男を愛する苦しさに堪えられず、どちらも楽しく、より長く相手を愛しつづけ得られるために、相互に愛人以外の男女を探すという手段。つまり互いの中心を堅固にする方法として……」。六十二歳の信吾にも、こうした貞操観は「警句でも逆説でもなく、立派な洞察のようにも思えた」と書かれている。

(三) 戦後の混乱した世相

戦後の日本が廃墟の上に改めて建設される過程は一つの苦しい歷程であった。当時の混乱した世相を、「山の音」も生き生きと描いた。

娼婦が氾濫する。鎌倉のような景色の美しい文化人の町にも娼婦が増えた。東京新宿の御苑で、白人の兵士は白日でも娼婦を堂々とからかっている。信吾が電車の中で出会った男娼について、作者はこう描いている。「青年は外人の膝の上の掌を上向けて、自分の手をそれに重ねると、やわらかく握った。いかにも満足した女のような顔つきだった」。外国人は「恐ろしい顔つきだった。その血色のよさは、土色の青年のつかれをなお目立たせた」。「青年はくすんだ臍脂のシ

シャツを着て、上のボタンの一つはずれたところに、胸の骨が見えていた。信吾はこの青年が遠からず死ぬような気がした」。

麻薬密売。房子の夫相原は作品において正面から描写されたことがないが、信吾の口を通して、彼は酒から、麻薬の虜になり、更に麻薬販売の手先に使われ、妻、子供と足の悪い母親をかまわなくなり、結局、房子の荷物と住む家さえも全部他人のものになり、ほかの女と心中の道を辿ったということが語られる。作者は次のように書いた。「相原の落ちるのを支え得なかったのは、房子か、信吾か、相原自身か、その誰でもないのかと、信吾は暮れなずむ庭に目をやった」。誰でもないなら、社会のせいにならざるを得ないのではないだろうか。

老衰者の運命。病気に苦しめられている老人は自殺によって抜け出そうとする。更年期の妻に虐待された鳥山のような人は女房が怖くて帰れない。ご飯をこそこそ食い、妻と子供が寝静まってから帰る。このような「五六十の堂々たる紳士」が、「夜中にそとをさまよっているのは、いくらもあるんだよ」と書かれている。また、菊子の友達のように堕胎してから自殺しようとする例もある。

房子の娘里子が着ものをねだるため、危うく人命に関わる交通事故を引き起こしかけたエピソードは、亭主に捨てられた女性の惨めな生活苦を表わしている。時々の停電で、レコードが途中で止まったり、夕飯の間、細い蠟燭の火が透間風で三四度消えたりする……

読者はこのようなことを通して、戦後の日本社会の様子をある程度窺えるだろう。

四

以上述べたことで、「山の音」の創作について下記のように再認識できるかと思われる。

「山の音」には確かに川端文学の一貫したテーマ、即ち死と夢幻というモチーフがある。そして、十六章からなる作品の中に見られる、季節の移り変わりにより、春夏秋冬、さまざまな自然景色、動植物に対する描写はモチーフを引き立たせるに極めて積極的な役割を果たした。その芸術の手法もその他の創作に相通じている。本文の第一段にまとめた日本の作家たちのこの作品に対する評論は、殆ど非社会的な美意識の視点から着目したのではないだろうか。これによって、中国の一部の研究者も「山の音」と川端の戦後の創作における虚無と頹廢の消極の面が戦前の創作よりもっと明らかであると思っているようである。

奥野健男の説によると、川端文学は自分の私生活を意識的に隠すのである。「身辺雑記だけでなく、川端康成は自己の恋愛や失恋や愚行や挫折や貧乏や病氣や家庭生活や社会的政治的行動などを直接自己告白的に作品化することも殆どない」（学研「現代日本の文学16」評伝の解説。以下同）。つまり、川端は私小説類の作品を書かな

ということである。ところが、これは彼は家庭というテーマの作品を書かないことを意味しない。もっと正確に言うると、「山の音」は日本の戦後初期の家庭生活を反映する一種の家庭小説である。明治時代の家庭小説の名作である徳富蘆花の「不如帰」が封建的家庭に傷つけられた女性を描き出し、封建主義の家父長制意識に明らかに反対する社会的役割を持ち、菊池幽芳の「己が罪」が女性の誠実な純愛の勝利を表わし、一夫一妻の健全な家庭道徳を提唱する社会的役割を果たしたというならば、「山の音」は戦後日本の家父長制家族が戦前より速く崩壊し、価値観、民主意識が大きく変わった背景のもとに、庶民の家庭矛盾と生活の様子をよく反映したと言える。信吾の最後の切実な願い——「五万年も経って起き出してくると、自分の難儀も社会の難題も、すっかり解決済みで、世界は楽園になっている」というのは、恐らくこの時代のあらゆる日本人の願望であろう。こうしてみると、「山の音」という作品は川端康成のその他の代表作に比べて社会性を強く持っている作品だと言っても過言ではないような気がする。

そして、家庭小説の多くはその現代通俗性を特徴とする。「山の音」に現れている信吾一家の生活や当時の社会の様子は明らかにこの特徴を持っている。伊藤整も「川端康成(二)」の文章の中で次のように指摘している。「この小説のほうがずっと写生的であり、かつ日常生活の中にある人間の姿を、小さなスケッチを重ねるように描

いたものだと分かる。……たぶん作者はこの『山の音』のほうに実生活から得た日々の印象やスケッチやその当時の社会風俗などまで正確に書き現そうと考えていた。その態度は言わば『本格的』な小説創作に向かう態度である。『私小説的作品を殆ど書かない』、『日常の身辺雑事的な事柄や心境をこまごま描き小説作品として提出することをしない』(奥野健男) 川端康成がこういう『本格的』な態度で社会風俗などを正確に書き表わし、自分のそれまでの作品のイメージを異にした社会性を持つ、分かりやすい『山の音』を創作したことは、戦後一定の期間に多くの純文学と目された作家が中間小説、通俗的文学を創作する風潮と関係があるのではないかと思われる。よく考えれば、「山の音」は正に川端が創作した中間小説であるような気がする。川端康成はその生涯の創作の中で、芸術性の高い、しかも社会性を持つ通俗的作品の創作にも有益な試みをし、そして素晴らしい成果を見せた。「山の音」の創作はその有力な証明のほずである。

一九九六年七月 京都市国際日本文化研究センターにて

参考文献

- 「川端康成」(日本文学研究資料刊行会編 有精堂一九八八)
「群像日本の作家13 川端康成」(田久保英夫等著 小学館一九九二)

- 「川端康成 日本の美学」(羽鳥徹哉編 有精堂一九九〇)
「日本文学全集40 川端康成(二)」(集英社一九七八)
「現代日本文学館24 川端康成」(小林秀雄編 文藝春秋一九六六)
「文芸読本 川端康成」(河出書房新社一九七七)
「奥野健男作家論集2」(泰流社一九七七)
「日本各家論川端康成」(譚晶華、夏剛訳「日本文学」一九八三年
No.3)